

閉域に滞留し、歴史を展開する
 ——松田智裕『弁証法、戦争、解説』に寄せて——

Staying with the Closure, Unfolding the History
 ——A Response to *Dialectique, guerre, déchiffrement*

小川 歩人*

本稿は、松田智裕『弁証法、戦争、解説 前期デリダ思想の展開史』（法政大学出版局、2020年。以下、特に表記のない場合には「～頁」で本書の該当頁を示す）のデリダ研究における意義と射程についてあつかう¹⁾。以下では、まず本書の特徴と戦略について先行研究との関係からまとめ、次いで、主に第二章、第三章にかんして「エクリチュール」と「目的論」という観点から指摘を加えることで、本書全体の性格を際立たせることにする。

1. 本書の特徴

本書『弁証法、戦争、解説』は、1950年代から1970年代初頭にかけてのデリダの前期思想へ注目し、「戦争」という主題を軸として、デリダが「解説」の思想を展開した過程を明らかにすることを目的としている（4頁）。本書も述べるように、デリダの修士論文『フッサール哲学における発生の問題』が出版された1990年以降、Marrati 1998やLawlor 2002を嚆矢として、とりわけ英語圏で初期デリダの思想形成をフッサール現象学研究に定位す

*大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構特任助教、人間科学研究科招へい研究員

るのは、ひとつのスタンダードになっている。積み重なる生成史に対する再帰的検討も年々進んでおり (Cf. Kates 2005、Hägglund 2008)、更にこれまで未刊行だったセミナーやデリダの蔵書目録、草稿の研究も加わることで (Baring 2011、Vitale 2018)、その精緻さは今後も高まっていくものと思われる²⁾。このような近年の国内外のデリダ研究は同時代人デリダというよりもむしろ歴史化されていくデリダ像にいかに向き合っていくかという視点を強めている。そのなかでも近年の初期思想に定位した研究は、エクリチュールの戯れ、軽薄なポストモダニズムといった粗雑な受容や、理論的／実践的分割、倫理的政治的転回、宗教的転回といったテーマティックな数々のセンセーショナルな「転回」によってデリダをラベリングすることへの違和感を一定程度共有している。そして、そのような違和感は初期の哲学的主題から出発して、デリダ思想を精密に読解しようとする傾向に結びついているように思われる。『エクリチュールと差異』、『声と現象』、『グラマトロジーについて』、『哲学の余白』といった著作、論文集は解体され、初出時の異同、その生成が問われることとなるのである。本書もそのような分析的態度を共有しており、偉大な哲学者というよりもむしろ若きデリダが一人の探求者として当時の文脈のなかでいかなる解釈をおこなってきたのかを丹念に追っている。率直に言って、初期テキストの出版以後の研究蓄積に対して本邦の研究書はあまり明確な態度をとってこなかったように思われる。本書は国内外の先行研究を踏まえつつ、初期、前期、中期、後期というかたちでデリダの思想を区分し、とりわけ 1950 年代から 1960 年代を前期と呼び、デリダの思想がいかに関各時期へ接続され、展開していったかを検討する年代記的な構成になっている。先行する研究蓄積に対して正面から向き合おうとする本書の姿勢はまずもって評価されるべきである。

その上で本書の特徴を端的に述べれば、一読してわかるように、フッサール、ハイデガー、レヴィナスとの比較という「オーソドックス」あるいは「オーセンティック」な研究をおさえつつも、その強調点を初期デリダのフッ

サル／ハイデガー解釈へ結び付けられるとする弁証法思想、つまりイヴォ
ンヌ・ピカールの時間の弁証法、ジャン・カヴァイエスの概念の弁証法、ト
ラン・デュク・タオの唯物弁証法との対決においてのことである³⁾。ピカ
ール、カヴァイエス、タオとの関連はデリダが度々明言していたものの先行
研究でも十分にあつかわれてきたとは言い難い。本書は、これらの哲学者たち
との対話を「互いに異なる要素が相互に作用しあい、そのなかで新たなもの
が無限に生じるような力動的な運動」としての「弁証法」(174頁)あるいは
「軋轢」という主題のもとでまとめあげ、これが60年代後半の「差延」思想
の成立へと向かっていくのだと主張する。

大まかな構成を確認しておけば、第一部がピカール、カヴァイエス、タオ
を通したフッサール読解、第二部が差延思想の成立に向かうアルトー、ハイ
デガー、ニーチェ解釈の検討といった流れになっている。本書が、最初期の
著作において使用され後に放棄されることとなる「弁証法」という「閉域」
にあえてとどまり、それを乗り越えられるべき「行き詰まり」ではなく、む
しろその後引き継がれていく「彷徨の運動」として、初期デリダの思考の
道筋を丹念に追ったことはまずもって評価すべきことである⁴⁾。本書は先行
する「デリダ派」にしばしばありがちなフッサール、ハイデガーの限界や矛
盾の指摘、「安易な」脱構築を避け、近年の現象学研究の水準を踏まえつつ、
いかにデリダが現象学の枠組みに負ってきたのかを示している。とりわけ、
第一章ではピカールの論文「フッサールとハイデガーにおける時間」(1946)
があつかわれ、実存主義の興隆において先端的とみなされていたハイデガー
的時間論に対するオルタナティヴとしてフッサールの時間論を再読しよう
としていた50年代のデリダの理論的視座が説得的に示されており重要であ
る。安易な比較研究はともすれば文脈を踏まえず、テキスト読解の機微をな
いがしろにしまいかねないが、本書の態度は、デリダに複数の固有名を
着実な読解のなかで説得的に結びつけているといえる。ここから、さらに背
景に写る固有名の数々、たとえば、ピカールの師であったモーリス・メルロ

= ポンティの時間の弁証法⁵⁾、カヴァイエスを批判的に参照していたジャン・イポリットの学知の弁証法、科学認識論的な弁証法を語ったガストン・バシュラールといった名を透かしてみることもできる。本書は先行研究の単線的なヘーゲル主義への依拠を警戒しているが、フランスにおいて実存主義、現象学、マルクス主義、科学認識論に浸透していたヘーゲル主義はすでにして単純なものではないだろう⁶⁾。本書は、先行研究に対する批判、デリダによる明示的な参照を掘り下げることで、複雑に絡み合う弁証法思想の水脈を指し示している。

「戦争」という主題、訳語についても触れておきたい。戦争という語でもって本書の内実にひかれた読者は、理論的な語り口、解釈の運動というそれ自体抑制的に思える解釈に、控えめな印象を受けたかもしれない⁷⁾。たとえば、後期デリダにおける法や正義、積極的な政治的発言の諸帰結についての解説を期待していた場合、そのような読解は本書では展開されず肩透かしを食らうかもしれない。しかし、「理論的」と称されてきた初期のデリダの政治的実践との距離感が、自身の出自、つまりアルジェリアとの微妙な関係を反映していたことはデリダの証言やブノワ・ペータースによる伝記を紐解けばみてとれる。確かにデリダ自身は「戦争／平和」の表面的な二項対立を語ることを避けていたが、「暴力と形而上学」において、たとえば全体性の暴力たる戦争に対し、言葉によって切り開かれる他者との平和の次元を主張したレヴィナスへ、むしろ絶えざる「最小暴力」と「戦争」という主題を衝突させたデリダの脳裏に、当時の中東戦争、アルジェリア戦争という背景があったことは想像するにたかたくない。このような言い方は、現実的な戦争の水準から距離をとり、存在論的な水準における抗争をハイデガー読解において示そうとしたデリダの意図を裏切るものであることは承知しているが、少なくともそう言うしておくべきだと評者は考える。時局的な発言をおこなう媒体をもたなかったデリダにとって、哲学的な水準において解釈をおこなうことはま

さしく政治的応答として二重性を帯びていたのではないだろうか。このような解釈は本書の中心には存在しない。しかしながら、複数の語をまたぎ、位置をずらして論じられる「戦争」という主題は、「前期デリダ」というエポックに折り込まれたコンテクストを重層的に想起させる。それゆえに、本書における「戦争」という主題、訳語の選択は、本書の大きな問題提起のひとつであり、デリダのエクリチュール、そして知識人としての実践とは何であったのかを初期から一貫させつつ問う際の重要なマークなのだと、言っておくべきだろう。

2. 問題提起 エクリチュール、目的論、解説

ここからは、本書が先行研究を切り分けながら提示した、いくつかの論争的な論点をもう少し検討をしてみたい。本書はデリダが引用する論者を丁寧に参照しつつ、注釈を加え、デリダとの比較を通して、その思想の展開を記述している。一読してわかるクリアな本書のスタイルは「手堅い」研究であることを必ずしも意味しない。このような表現に驚く本書の読者もいるのかもしれない。確かに「前期デリダの展開史」という本書の関心は、慎重に境界確定され、極めて慎ましいもののようにみえる。しかし、その慎ましさは先行研究に対する強い異議申し立てを含む解釈の提示と、当然のことながら表裏なのである。

著者は、先行研究の第一の問題点として「良くも悪くも「エクリチュール」や「現前の形而上学」を語る一九六七年以降の著作のフィルター越しにデリダの思想形成を考察している点」を挙げている（25頁）。著者は初期デリダをあつかう先行研究について、「六〇年代後半の形而上学批判やエクリチュール論を帰着点としてあらかじめ設定し、その萌芽を『発生の問題』や『序説』といった五〇年代～六〇年代前半の著作のなかに遡及的に見るといいう仕方で議論を組み立てている」と指摘する。そして、そのために「記号や

言語の問題がまだ現れていない『発生の問題』のような著作は、この問題を論じた『序説』と比べ、デリダがまだ自分の問うべき問題を自覚していない段階の著作として扱われ」てしまうのだと述べる(26頁)。それゆえに先行研究のなかで「デリダの思想展開は、言語の問題を問うていなかった『発生の問題』から、彼がこの問題を自覚し、「エクリチュールの思想家」へと成熟していく過程として描かれることが多い」(25-26頁)。しかし、本書はこのようなデリダ思想の描き方は「適切な整理とは言えない」と指摘する(26頁)。本書によれば、「そもそもデリダにとって、「エクリチュール」は、「差延」とほぼ同義で用いられ、様々な要素が互いに作用し合いながら別のものへと関係していく「差し向け (renvoi)」の構造を意味するのであり、この点で、彼の言語論は、言語や記号の特性の探究というよりは、相互関係の探究である」(26頁)。強い主張である。

確かに、評者自身、初期デリダの研究から解釈を進めており、著者の姿勢には共感するところが多い。たとえば前掲のローラーは、「序説」におけるエクリチュールの主題化を「言語論的転回」と呼び、『発生の問題』に対して「序説」を引き立てる典型例である⁸⁾。「言語論的」という修辞が今日に至るまでデリダの思想のイメージを規定しているが、そもそも「言語論的」とは何を意味するのかが曖昧である以上、そのようなラベリングはあまりに粗雑であり、エクリチュールという主題自体をどのように解釈するのかをこそ問題にするべきであろう⁹⁾。

ただ、もう少し踏み込んでみたい。本書の言うように、デリダにおけるエクリチュールの主題の登場を中心に据える解釈は「適切な整理とは言えない」のだろうか。エクリチュールという主題はデリダの思想形成に対して副次的な意味合いしかもたないのだろうか。「相互作用」と「差延」との差異は、50年代と60年代を媒介する「ほぼ同義」のなかに吸収されるのだろうか。むしろデリダがしばしば注目する「ほとんど無い *presque rien*」のような差異をこそみるべきではないのだろうか¹⁰⁾。

率直に言えば、本書の文献学的な「慎ましき」と異議申し立ての「野心」のあいだには微妙に齟齬があるように思えなくもない。たとえば先に述べたようにピカール、カヴァイエス、タオといった哲学者の背景はさらに整理される必要があるだろう。また、サルトルやハイデガーの影響についても先行研究の不十分さを指摘するために最低限の記述にとどまることは理解できるが、同様に精査される必要があるように思われる。ただ、そのような無際限に広がりかねないテクス的な網目を境界確定しまとめあげることこそ、一冊の書物に集約される著者の哲学的身振りであるとすれば、無い物ねだりをするよりも、本書の論争的な関心を際立たせる方がよいだろう。紙幅の関係上、細かな検討はできないため、本書の二点の主張、A. エクリチュールの概念はデリダにおいて主要な思想的転回点とは言えない、およびB. デリダの目的論批判は初期においては必ずしも当てはまらない、について主に第二章、第三章の内容にかかわる部分を検討したい。

A. エクリチュールの概念はデリダにおいて主要な思想的転回点とはではない

まずテキストの布置について整理しておく。『発生の問題』には、いくつか「幾何学の起源」の訳の書き換えを事後的に指示する注が存在するが、そのうちの一つはジョシュア・ケイトも指摘するように¹¹⁾、『発生の問題』最終部のフッサールの歴史主義についての批判である (PG267/329)。この事後的な注において、「幾何学の起源」仏訳において『発生の問題』の誤訳を訂正したと加筆されており、50年代後半から60年代前半に読解態度の転換があったということが推測される。このような作業は、直接的には亀井が指摘しているように『発生の問題』出版以後、「幾何学の起源」は言語への言及部分が収録されたフッセリアーナ版が出版されたこと関係するだろう¹²⁾。更に言えば、この時期、1957年に「ヒューマニズム宛書簡」、1958年に『形而

上学入門』、1962年に『拙道』の仏訳が出版される。いずれも後期ハイデガーにおける言語の身分が強く見出されるテキスト群である。これらのテキスト群の位置も『発生の問題』から「序説」の連続性に疑念を呼び起こすものではある。しかし、そうはいつでも、デリダが後年振り返って『発生の問題』という最初期のテキストに「そのとき以来、私が明らかにしようと試みたすべてのことを、その定式化の一字一句に至るまで要請し続けることになる」「ある種の法則」(PG VI /vii-viii)が見出されると述べている以上、50年代と60年代の連続性という本書の主張を毀損するものではないかもしれない。

では、本書の解釈の中心をなす「弁証法的軋轢」の内実に対してはどうか。本書は「フッサールの語る意味形成と意味沈殿の二重運動としての歴史」を「主観と対象が、過去と未来にわたって、相互に生み出しあい、規定し合う弁証法の運動」であると主張する(114頁)。このとき本書では、同時にしばしば「意識」や「主観」と相関的な「能動的理解」が強調される(Cf. 114,152, 155, 285頁)。このことは、「解説」という本書のもう一つのモチーフにも繋がっている。著者は「エクリチュール」を「書いた主観と読む主観との潜在的な対話が可能となるような『自律的で超越論的な場(champ transcendantal autonome)』(OG, 84/133)を形成する」(137頁)ものだと主張する。ここで、著者は、亀井2019を念頭に置きながら「読み手によって異なる意味で読まれる「言語」そのもの」よりも、むしろ「「様々に特異な見通し」や「意味の様々に多様な連鎖」を生じさせる意識の能動的な再活性化」にこそ言語の意義を見出そうとするのだという(155頁)。

しかし、このような本書の解釈は、「序説」におけるデリダの強調点、つまり「客観的な属格も主観的な属格も表していない」、「発生的な関係の純粋な可能性としての属格性そのものの絶対者」という強調点をずらしていないだろうか(113頁, IOG157/237)。このことは著者の引用がその周辺のデリダの記述を、つまり、「エクリチュールはすべての顕在的主体が姿を消しうる一種の自律的な超越論的領野をつくりだす」(IOG84/133)という記述とともに

にジャン・イポリットを参照しつつ言われる「主観なき超越論的領野」(ibid.)という表現を取り落としたことと合わせて重大である¹³⁾。つまるところ、評者には「能動的解釈」という表現が避け難くもつ、ある種の二項論理の雰囲気は、著者がフッサールの超越論的現象学に寄り添いつつ弁証法的相互作用を語ろうとするために強いられたものように思われるのである。これに対して、むしろ弁証法的論理「の」「パサージュ」(IOG166/245)こそ、「序説」において見出された「エクリチュールという超越論的領野」であり、存在と存在者の「差異」、「あいだ」の論理と呼ぶべきではなからうか¹⁴⁾。また本書第二部で強調されていく、ハイデガーの「二重襲」、ニーチェ的な「諸力の差異」といった理論装置は、弁証法的な構図の「あいだ」の拡張においてこそ理解されると思われるが、エクリチュールの問題を評価できず、二項論理的な弁証法的な論理を維持する『発生の問題』にはそのような問題系はやはり見出しづらいのではないか。

とはいえ、まさに弁証法的な軋轢あるいは戦争こそが、そのような「あいだ」であるのだと、本書は主張するのかもしれない。確かに著者が参照する1968年の「差延」論文では、デリダ自身がニーチェに依拠しつつ、「諸力の差異」と「能動的解釈」の必要性を述べてはいる(256頁, MP19/上59-60頁)¹⁵⁾。だが、たとえばパースの記号過程論を参照しつつも、初期デリダにおいてエクリチュール論の独自性を後景化させ、意識や主観の位置を際立たせながら「能動的解釈」を前景化させることで、前期デリダのエポックを記述する本書の身振りは、次に触れる「目的論」の擁護とも絡み合いつつ、微妙な布置を構成するように思われる。

B. デリダの目的論批判は初期においては必ずしも当てはまらない

本書では、先行研究における「デリダはフッサールの「歴史の目的論」に対し、一貫して批判的な立場をとっている」という解釈に対して、初期デリ

ダにおける目的論の意義が主張される(118頁)。著者は「晩年のデリダがフッサールの歴史哲学に対して批判的な態度をとっていたことは紛れもない事実であるし、本書もそれを否定するつもりは毛頭ない」としつつ「だが、これと類似の議論が、1962年の『序説』でもなされていたとなると、話は別である」と先行研究に対して切り返す(118頁)。そして、「歴史の目的論が必ずしも決定論的な歴史観にはつながらない」と主張する(118頁)。著者は明示的には Staten 1984 や Maratti 1998 へ批判を加えているが、このデリダにおける目的論批判としての歴史という解釈は日本でもオーソドックスだと言って良い。たとえばデリダ研究としては、東浩紀『存在論的、郵便的』(1998)、佐藤嘉幸『権力と抵抗』(2009)、亀井大輔『歴史の思考』(2019)などがあげられ、この主張もかなり強いものである。

本書では、特に第二章と第三章において、「序説」におけるフッサールの歴史の目的論解釈が検討されている。フッサールは最晩年のテキストである「幾何学の起源」において、「様々な幾何学的活動の歴史的連鎖をたどることで最終的に行き着く原創の意味を自覚することが、そのような連鎖を方向付ける目的理念を自覚することである」という目的論的態度をとった(149頁)。著者が指摘するように、デリダは「序説」において晩年のフッサールによる目的論的主張、つまり、幾何学を範例としつつ、学知が無限に改訂され、完全な真理へ向かっていく歴史的運動の記述に注目している。著者は、カヴァイエスによる批判を退けつつ、このフッサールの目的論が「規定的で閉じられたものではない」ということを強調する。つまり、この目的理念は、「すでに規定された形相的な現前者ではなく、そのような規定がなされる可能性の開けそのもの」であり、まさしく「不断に生じる新たな再理解の中で際限なく先へ先へと広がっていくような運動」を支えるものである(285頁)。この開かれた目的論が、初期デリダにおける、「理解がさらなる理解の余地を生み、謎への応答がさらなる謎を引き起こすような解釈の経験」、という本書の中心的モチーフを示すものとして提示される(287頁)。このような像

は、先行研究における過度な現象学批判を、デリダの現象学との取り組みのなかで捉え直しつつ、その思索の内実を先行研究とともに更新するようと思われる。

ところで、本書が正しく指摘するように、フッサールが主張するのは「歴史のすべてを貫く目的論的理性」（114頁、Hua. VI, 386）、「理性の普遍的目的論」である（149頁、Hua. VI, 386）。デリダはこれを自身の思想として支持しているのか。「決定論的でない」ことが、フッサールの目的論の擁護へ即座につながるのか。ここには疑問の余地がある。本書は、この主張をフッサールのテキストに付されたイントロダクションである「序説」を中心に提示しつつ、最晩年の『ならずもの』（2003）からの距離を指摘することで、前期デリダの目的論の肯定と後期デリダの目的論の批判を切り離す。しかし、著者が前期デリダにおける「フッサールの目的論の肯定」というテーゼを主張するためには、本書がこの論点に関して迂回している周辺のテキストとの関係を精査する必要があるように思われる。というのも、本書の指摘にもかかわらず初期あるいは前期デリダはすでにフッサールの目的論を十分に警戒しているからである。

テキスト解釈として問題となる箇所をみておく。まず『発生の問題』において、デリダは明らかにフッサールの「歴史の目的論」を評価していない。デリダが弁証法という語をめぐって問おうとした「唯一現象学を産出して基礎付けることが可能だった存在論的発生は、目的論的形相の名において「中立化」されたままであるが、この目的論的形相それ自体も還元されねばならなかったはずであり、晩年の「フッサールの歴史哲学は、最も疑わしい哲学史と一体を成すことで現象学的な企図の手前に留まってい」たとされる（PG282/281-282頁）。

このようなデリダの態度は、解釈の深化を続けつつも、1959年の「〈発生と構造〉と現象学」において維持されているように見える。確かに、デリダはフッサールの〈テロス〉を、「無限の実践的課題としても同時に与えられ

る無限の観照的予期としての予持 (Vorhaben) の謂」であり、「全面的に開かれており、それは開けそのものである」と評価している (ED 250/336 頁)。しかし、同時にデリダはフッサールの「現象学」と「形而上学」の共属を指摘し、その境界に対して注意を促してもいる。「古典的な形而上学的思弁は逆にフッサールによると、それらの固有な糸の明確なエネルギーを現象学のうちに必ずや認めるだろう。それはとりもなおさず、古典的形而上学を批判しつつも、現象学は形而上学の最も深い企図を成就している」のである (ED249-250/335 頁)¹⁶⁾。

そして、1965年の高等師範学校での「ハイデガー 存在の問いと歴史」講義では、ヘーゲル、フッサール、ハイデガーの歴史哲学に対するデリダ独自の見通しが提示されるが、そこではハイデガーを携えつつ、フッサールの目的論に付着する意識の哲学、学的性格、ヒューマニズム、生活世界概念の孕む形而上学が批判されている¹⁷⁾。著者は、これらすべてを問題にせず、(というもフッサールのテロスはきちんと読めば開けそのものであるし、そのような要素はフッサールに対する「本質的な」批判たりえないから)、むしろ引き受けているようにさえ思われる。しかし、以上のようなデリダの議論を鑑みるに、本書で展開される読解に対して前期デリダというエポックのうちには、やはり裂け目があると言わざるをえないのではないだろうか。

このような裂け目を前にして、本書の記述もいくらか揺れているようにみえる。たとえば、本書は60年代後半の『声と現象』や『哲学の余白』といったテキストにおいて、デリダがフッサールの「カントの意味での理念」のうちに「完全性の断念」を読み取ったと正しく述べている (167頁; MP201/下23頁)。しかし、このことをフッサールは承服するのだろうか。フッサールがそのように学的理念を断念するのだろうか。むしろまさに「歴史の目的論」をデリダがそれとして肯定していないゆえに「断念」などと呼ぶことができるのではないのか。「歴史の目的論が必ずしも決定論的な歴史観にはつながらない」。それはそうである。目的論とはそもそも構成的ではなく、統制的

な理念として要請されているからだ。目的とその成就とのあいだにはブレがある。フッサールの「内的矛盾」を完徹しようとするラディカルさにフランスの解釈者たちは魅せられてきたとさえ言えるだろうが、それゆえに歴史の目的論、あるいはその目的論の断念が刻み込まれた信がはらむ欲望、その方向指定をこそ、デリダは形而上学的な欲望とみなし、絶えず標的としていたのではないか。そして、このことは晩年のみならず初期デリダにおいても一貫した視座であると評者には思われる。本書は第五章「彷徨、争い、差異—デリダのハイデガー解釈」において、ジャン＝リュック・ナンシーを引きつつ、ハイデガーの両義性を注記しているが（207頁以下）、なぜかフッサール読解についてはそのような両義性を弱く解釈しているようにみえる。（本書はしばしば地平の主題化されない性格を指摘しているが（146頁）、デリダはオイゲン・フィンクの主題的／操作的概念の区別をひきつつ、まさに主題的に扱われない操作的概念にこそフッサールの問うことのない前提があるのだと指摘してはいなかったか）¹⁸⁾。

本書第三章において、言語の一義性と多義性を比較しつつ、「科学の進展における真理の増大や理論の進展を促すような能動的な理解そのものに内在的な多義性」（154頁）なるものを主張するとき、その「戦争」、「軋轢」という語義にもかかわらずどこか統制された「穏当さ」が見え隠れする。ここで、本書の主張は典型的なデリダに対する懐疑主義、相対主義、文学的といった修辞を避けるために、あまりにも学的な規範性を保持しようとしてはいないだろうか。あたかも、人文学、大学の危機が叫ばれている今日において、人文学がいかなる意義をもつのか、まさに晩年のフッサールその人に危機意識を再活性化せよと呼びかけられているかのようにさえ感じられる。かつてデリダが同時代にもっとも近いと感じていた哲学者ドゥルーズは、デリダの「序説」を参照しつつ、フッサールが曖昧な本質を極限化の運動へ従属させようとすることに疑義を呈し、その手前の「曖昧な本質」に王道科学を逃走させようとする遊牧科学の位置をみていた。ドゥルーズの言葉を介し

て本書の主張を評すれば、本書はあまりにフッサールの、遊牧科学の可能性を王道科学へと従属させようとしてはいないのだろうか¹⁹⁾。同型の解釈は第一部を超えて第二部の第四章のアルト一論における生の形而上学の迂回にもみられるが、こういった本書の解釈の傾向は先に述べたように本書全体にかかわってくるように思われる²⁰⁾。

おわりに 再度、デリダの後からデリダを読むこと

さて、以上検討した本書の論点は、先行研究に対する異議申し立てとして50年代と60年代の蝶番、つまり、本書が整理するところの前期デリダというエポックの統一性を保証するものである。本書に先行する解釈者たちがそもそも後期の視点に耽溺し、『発生の問題』に後続するデリダの思想の理路を十分に検討してこなかった、ということは指摘されなければならないし、指摘しすぎることはない。しかし、著者によって縫合されたこの前期デリダというエポックそれ自体の統一性は再度揺り動かされるのではないか。これを、もう少し違った角度からいささか誇張的に言ってみれば、本書の諸テーゼには、「主体」と「学」をいかにして成り立たたしめるのかという態度が強く感じられるのである。率直に言えば、そのような本書の態度は、前期デリダがもっていた主体が溶解していく発生の次元を析出させるようとする傾向とは、別のベクトルではないだろうか²¹⁾。本書は2019年に提出された著者の博士論文がもととなっているが、そのタイトルは「弁証法、戦争、遊戯——前期デリダ思想の展開史」であった(290頁)。評者の関心は、この「遊戯」から「解読」への変更は何がおこったのかということでもあるだろう。後期の視点を混入させまいとして前期に内在しようとした本書の読解がむしろあまりに後期デリダ的な視点を内面化した戦略である、ということは著者の意図を裏切るかもしれないにせよ問うてみたかったことである。

ただ、いささかここまで論点を絞りすぎたきらいがあるので、もう一度広

げ直したうえで、評者の問いの所在を明確にしておきたい。後期デリダの視点を避け、前期デリダを論じようとした著者に対して、いやそのような著者の態度こそが後期の視点を織り込んでいるのではないのか、と言うこと。このような言い方は前期デリダというエポックを検討しようとする著者からすれば否定的に響くのかも知れない。事実、2020年におこなわれた合評会では、評者の問いかけはまず本書の方法論的な不徹底を指摘するものとして受け取られたと記憶している。しかし、後期デリダを知らないふりをして前期デリダを読む本書の態度こそが、後期デリダを通り過ぎて、もはやポストデリダ的視点と言うべき視点を提示しているのだとすればどうだろうか、とやはり指摘しておかねばならないのではないか。ここが気になるのである。評者の誤読であると言われればそれまでであろうが、本書が前期デリダ解釈を通じて、デリダ以後的な問いかけを生み出している、というこの錯時的な読後感は何なのだろうか。おそらく、先に述べたように本書が強調する論点は、今日の人文学の危機に即応しようとするデリダ派に対する批判あるいはデリダその人がもつある傾向性に対する批判でもありうる、とすればどうだろうか。デリダの死後、カトリーヌ・マラブーやジャック・ランシエール、ジャコブ・ロゴザンスキーといった思想家たちは、とりわけ後期デリダにおける不可能性の主題が神秘化を招き、今日的な現象を記述できていないあるいは政治的な不能に陥っていると批判し、むしろデリダとは異なる新たな形象をこそ見出そうとしている²²⁾。今日、ポストデリダ的プロブレマティックをいかにして記述するのか、ということが問題になっているとすれば、評者が本書の問題提起に対して提示した解釈、つまり、「本書における「主体性」の強調は「デリダ的ではない」という指摘は不可能性に淫する保守的な態度なのかもしれない。この地点で「主体の後に何が来るのか」というジャン＝リュック・ナンシーの問いかけを今一度検討すべきようにも思われる。

あるいは学的理念に対する批判をおこなうデリダをひきたてようとする評者がすでにしてアカデミズムのうちで問いを発している。かつて実存主義

がそのものとして学に取り込まれていったように、いまや六八年の思想、ポストコロニアリズム、クィアスタディーズといった学の閉域を揺り動かそうとしてきたとされる諸分野も学のうちに場を持ちはじめている。このあまりに包摂的でリベラルな、まさにフッサール／ヘーゲル主義的とも言える「学知」の弁証法をいかに考えるか。今、「学」は何を包摂できないのか、あるいはまさに学による包摂によって何が抑圧されているのか。あるいはいかにして学の「普遍的」理念が矯正されるべきなのか。本書のフッサール／ヘーゲル主義は、そのような今日性において読まれるべきであろう。廣瀬は後期デリダの同語反復的スタイルや後退について述べ、本書がむしろデリダとは別様の地平を開いていくことを期待していると述べている²³⁾。このような言いは著者の意図を裏切るものかもしれない。しかし、一冊の書物とは、まさにその「言わんとする」ことをもっているはずであり、評者も本書のそれについて関心をもったのである。

以上が『弁証法、戦争、解読』に対するささやかなコメントである。このようなコメント自体、本書が先行研究とともにデリダのテキストを解釈し、とりあつめ、切り開いた新たな地平においてしか機能しない。本書によれば「解読」とは「隠れた意味の復元作業」ではなく、「むしろ「読む」という行為がテキストをさらに理解すべき余地、さらに読まれるべき暗号を生み出し、それによって解釈が不断に拡張して、テキストの意味が更新されていくという働き」を意味する(4頁)。「解読」はテキストに対する注釈によって自身のテキストを生み出し続けたデリダの実践的態度そのものであり、本書はこれを初期デリダのテキストの綿密な解釈を通して、その思想的核として取り出した。ここに後期デリダにおける解読の問題を接木すれば、メランコリックに神の声を聞き間違っているのではないかと戸惑うアブラハムの形象も見出されるだろう²⁴⁾。評者も同様に本書に対していささか乱雑な解釈を交えてしまったのではないかという不安をもっているのだが、本書が切り開いた地平にこのテキストを送り返すことでひとまずの応答としたい。

注

- 1) 本号での特集に加えて、廣瀬 2020、郷原 2020、長坂 2021、服部 2021 らの評も参照されたい。
- 2) このような傾向は Geoffrey Bennington の Derridabase (Cf. Bennington 1991) や Pierre Delain によるデリダの著作の詳細なインデックス Derridex (Cf. Delain 2007) といったアルシーヴ的網羅性に対するデリダの関心とも合わさっているだろう。
- 3) 「従来の研究では、五〇年代～六〇年代前半のデリダのフッサール論における「弁証法」概念の背景をヘーゲルの弁証法哲学に求めることがある。たしかに、フランスにはコジェヴやイポリットらを中心にヘーゲルの研究が盛んに行われてきた歴史があり、『発生の問題』や『序説』のなかでヘーゲルに言及されていることから、当時のヘーゲル受容がデリダの思想展開に大きな影を落としていることは疑いえない。ただし、デリダの「弁証法」の用法が、まずもって当時のフランスにおけるフッサール受容のなかで用いられた「弁証法」概念に強くかかわるものであることには留意する必要がある。そのため、五〇～六〇年代前半のデリダの「弁証法」の概念を単線的にヘーゲルに結びつけるのではなく、戦前・戦後のフランスにおけるフッサール受容の文脈を踏まえて多角的に検討することが不可欠である」(22 頁)。ただし後述するように、この三者のみを弁証法思想の直接のリソースとして指定するのは難しいように思われる。
- 4) たとえば 60 年代のデリダのハイデガー読解が「転回」以後の後期思想に色めくフランスのハイデガー読者に「行き詰まり」と評された『存在と時間』の再読にかけられていたことも想起される (Derrida 2013, p. 45)。
- 5) これについては、同時期のレヴィナスも同様の表現を用いている (De Waelens 1947, p. 80)。本書でも指摘されるようにレヴィナスは先駆的な業績としてピカールを評価しており、当時既に目を通していた可能性もある。
- 6) 長坂 2021 は手際良く本書の主張をまとめつつ、著者が注目する弁証法やデリダのドゥルーズへの参照を称して、内在主義、超越の不在、カント的プロブレマティックの回避を問題にしている。しかしながら本書とともに指摘すべきは、初期デリダのポストカント主義的地平、フッサール／ヘーゲルにおける超越／内在の絡み合いではないだろうか。このような初期デリダにおける括弧付きのヘーゲル主義は、エリック・ヴェイユが述べるところの「ポストヘーゲル主義のカント主義」(Cf. 宮崎 2018) と合わせて 1960 年代のフランス哲学の雰囲気をかたちづけているといえよう。
- 7) たとえば合田正人は『エクリチュールと差異』『訳者あとがき』にてデリダにおける「戦争」の主題に注目しているが、その奔放な連想と灰かしには惹きつけられるものがある (ED621 頁以下を参照)。
- 8) Lawlor 2002, p. 88.
- 9) たとえば、今日の実在論的流行におけるデリダに対するテキスト主義者であるという

批判を考えよ。Cf. 小川 2021.

- 10) 「ほとんど無である力は、自身が動かす体系と厳密には無関係である以上ほとんど無限の力である」(Derrida 1967, p. 363)。また合田正人は『エクリチュールと差異』『訳者あとがき』においてジャンケレヴィッチの『第一哲学』を参照しつつ、1960年代のデリダによる「ほとんど presque」の使用に注目している(ED623頁)。
- 11) Kates 2005, p. 221.
- 12) 『起源』は1954年に刊行されたフッセリアーナ版以前に、1939年1月に『国際哲学雑誌』にオイゲン・フィンク編集によって発表されているが、このフィンク編集版には言語についての記述の欠落がある(Cf. 亀井 2018)。
- 13) 「超越論的領野」という表現はよく知られている通り、サルトルが『自我の超越』において用いた表現である。「序説」においてサルトルの著作への明示的な参照は見出されないが、後年デリダはインタビューで「幾何学の起源」「序説」において自身が『自我の超越』について「主観なき超越論的領野」と関連して言及したはずだと述べている。この誤認からは当時のデリダがサルトルを念頭においていたことが窺える。Derrida 1987, 61頁。
- 14) 更に言えば、絶対精神と具体的実存とのバサーージュという論理構成は、ヘーゲルとマルクス、『大論理学』と『精神現象学』、論理と実存の関係を問うたジャン・イポリットに負っているように思われる。Cf. Hyppolite 1953.
- 15) ここから「真の能動性」は能動／受動の二項対立に収まらないのだという論点はあるえよう。この点についてはたとえば「差延」の中動相的性格にかんする分析としても展開される。國分 2017 および郷原 2018 を参照。
- 16) この点は、1959年の初出においてより顕著である。Derrida 1964, p. 259.
- 17) とりわけ『ハイデガー 存在の問いと歴史』第5回、第6回を参照のこと。Cf. Derrida 2013.
- 18) IOG155/333頁。Cf. Fink 1959.
- 19) Cf. 小川 2017.
- 20) 本書では、デリダがアルトールに「生の形而上学」という想定をみるからといって、それを批判しているわけではないと強調され、「生の形而上学者アルトール」ではなく、「生と疎外の必然性の境界にいるアルトール」こそが問題なのだと主張される(182頁)。しかし、器官なき身体形而上学こそ、たとえばデリダとドゥルーズの争点の一つであったことも忘れるべきではない。Cf. Derrida 2000; Derrida 2003; 小川 2017.
- 21) 本書における主体性の強調については服部 2021 においても指摘されている。これについては著者が初期デリダから切り離れた晩年のデリダによるフッサール読解について再考する必要もあろう。Cf. Derrida 2000; Derrida 2002.
- 22) Cf. Rancière 2009. また千葉 2013 は、「外部をいかにして肯定するかというドゥルーズ／デリダ世代の限界」に対する議論としてマラブーの思索をまとめつつ、来日講演

時のマラブーによる「ポスト構造主義における外部へのこだわりが超越化の恐れをもち、宗教の入り口になりうる」という指摘を紹介している（千葉 2013 189 頁）。このような後期デリダの神秘化のリスクという論点は東 1999 による後期デリダの整理としてもよく知られている。ただし、後期デリダの「メシアなきメシアニズム」といった着想がいかに宗教性を喚起しようとも、デリダの宗教的なものに対する距離感は指摘しておかねばならない。

- 23) 廣瀬 2020. 付言すれば、本書以後の著者による教育論はデリダとともに本書を引き継ぎつつ、本稿へすでに応答するものであるように思われる。
- 24) Cf. Derrida 1999; 郷原 2009.

略号

以下のデリダの著作からの引用は、以下の略号とともに頁数を本文中に記す。

I OG : *L'origine de la géométrie d'Edmund Husserl, Introduction et traduction*, Paris: PUF, 1962 (エトムント・フッサール『幾何学の起源』田島節夫、矢島忠夫、鈴木修一訳、青土社、1976 年)。

P G : *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl (1953-1954)*, Paris: PUF, 1990 (『フッサール哲学における発生の問題』合田正人・荒金直人訳、みすず書房、2007 年)。

E D : *L'écriture et la différence*, Paris: Seuil, 1967 (『エクリチュールと差異』合田正人、谷口博史訳、法政大学出版局、2013 年)。

M P : *Marges — de la philosophie*, Paris: Minuit, 1972 (下巻、藤本一勇訳、法政大学出版局、2008 年)。

参考文献

Baring, Edward, *The Yong Derrida and French Philosophy. 1945-1968*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013.

Bennington, Geoffrey, « Derridabase » dans *Jacques Derrida*, avec Jacques Derrida, Paris : Seuil, 1991.

Delain, Pierre, *Le concept d'œuvre de Jacques Derrida: Un vaccin contre la loi du pire*, Create Space Independent Publishing Platform, 2017.

Derrida, Jacques, « « Genèse et structure » et la phénoménologie » dans *Entretiens sur les notions de genèse et de structure* dirigé par M. de Gandillac, Goldmann et Piaget, Paris :Éditions Mouton, 1965.

———, *De la grammatologie*, Paris: Minuit, 1967.

———, 「自伝的な“言葉” —— pourquoi pas (why not) Sartre」生方淳子・港道隆訳、『現代思想』15 巻、8 号、1987 年、58-81 頁。

- , *Points de suspension. Entretien*, Paris: Galilée, 1992. (『「正しく食べなくてはならない」あるいは主体の計算』鶴飼哲訳、ジャン＝リュック・ナンシー編『主体の後に誰が来るのか?』現代企画室、1996年)
- , *Donner la mort*, Paris: Galilée, 1999.
- , *Le toucher*, Jean-Luc Nancy, Paris: Galilée, 2000. (『触覚、ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』榊原達哉、松葉祥一、加國尚志訳、青土社、2006年)
- , *Voyous. Deux essais sur la raison*, Paris: Galilée, 2002. (『ならず者たち』鶴飼哲・高橋哲哉訳、みすず書房、2009年)
- , *Chaque fois unique, la fin du monde*, Paris: Galilée, 2003. (『そのたびごとにただ一つ、世界の終焉』第Ⅱ巻、土田知則、岩野卓司、藤本一勇、國分功一郎訳、岩波書店、2006年)
- , *Heidegger : la question de l'Être et l'Histoire. Cours de l'ENS-Ulm 1964-1965*, Paris: Galilée, 2013.
- De Waelhens, Alphonse, « De la phénoménologie à l'existentialisme », in *Le choix-le monde-l'existence*, dirigée par Jean Wahl, Paris: B. Arthaud, 1947.
- Fink, Eugen, « Les concepts opératoires dans la phénoménologie de Husserl », *Cahiers de Royaumont Philosophie*, n° 3, Paris: Minuit, 1959, pp. 214-241.
- Hägglund, Martin, *Radical Atheisme, Derrida and the Time of Life*, Stanford: Stanford University Press, 2008.
- Husserl, Edmund, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Husserliana*, Bd. VI, Hrsg. V. W. Biemel, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1976.
- Hyppolite, Jean, *Logique et l'existence*, Paris: PUF, 1953. (『論理と実存—ヘーゲル論理学試論』渡辺義雄訳、朝日出版社、1975年)。
- Kates, Joshua, *Essential History: Jacques Derrida and the Development of Deconstruction*, Evanston: Northwestern University Press. 2005.
- Lawlor, Leonard, *Derrida and Husserl, The Basic Problem of Phenomenology*, Bloomington: Indiana University Press, 2002.
- Marrati, Paola, *La genèse et la trace*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1998.
- Peeters, Benoît, *Derrida*, Paris: Flammarion, 2010. (『デリダ伝』原宏之、大森晋輔訳、白水社、二〇一四年)。
- Rancière, Jacques, "Should Democracy come ? Ethics and politics in Derrida", in *Derrida and the Time of the Political*, Pheng Cheah and Suzanne Guerlac (eds), Durham and London: Duke University Press, 2019.
- Rogozinski, Jacob, *Le moi et la chair : introduction à l'ego-analyse*, Paris: Cerf, 2006.
- Vitale, Francesco, *Biodeconstruction: Jacques Derrida and the Life Sciences*, Albany:

State University of New York Press, 2018.

東浩紀『存在論的、郵便的 ジャック・デリダについて』、新潮社、1998年。

小川歩人「非連続の筆致——『触覚』におけるデリダのドゥルーズ批判をめぐって」『hyphen』第二号、DG -lab、2017年、39-47頁、<https://dglaboratory.files.wordpress.com/2017/05/e38090e8ab96e88083e38091e5b08fe5b79de6ada9e4babae3808ce99d9ee980a3e7b69ae381aee7ad86e887b4e28095e28095e3808ee8a7a6e8a69ae3808fe381ab.pdf>.

小川歩人「デリダ『幾何学の起源』「序説」における「文学的对象の理念性」の在処」、『フランス哲学・思想研究』、24号、日仏哲学会、2019年、107-118頁。

——「ポストモダンという毒／薬あるいはサプリメントの略歴——今日、ジャック・デリダを支点として」『現代思想』47巻、7号、青土社、2020年、185-194頁

亀井大輔『『フッサール「幾何学の起源」講義——デリダとの読解との対比を通じて』『メルロ＝ポンティ読本』松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編、法政大学出版局、2018年、300-309頁。

亀井大輔『デリダ 歴史の思考』、法政大学出版局、2019年。

郷原佳以「アブラハムから雄羊へ—動物たちの方を向くデリダ」『現代思想』37巻、第8号、青土社、2009年、156-171頁。

郷原佳以「デリダの文学的想像力 2「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へ——バルト、バンヴェニスト、デリダ1」、『みすず』、677号、みすず書房、2018年。

郷原佳以「2020年上半期の収穫から」『週間読書人』3349号、読書人、2020年。

國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』医学書院、2017年。

佐藤嘉幸『権力と抵抗——フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセラー——』人文書院、2008年。

千葉雅也『動きすぎではいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房新社、2013年。

長坂真澄「超越の不在と弁証法——松田智裕『弁証法、戦争、解読』書評」『表象』16号、表象文化論学会、2021年、206-209頁。

服部敬「書評：松田智裕『弁証法、戦争、解読——前期デリダ思想の展開史』」『倫理学研究』51巻、関西倫理学会、2021年、115-120頁。

廣瀬浩司「書評 松田智裕著『弁証法、戦争、解読——前期デリダ思想の展開史』」『週間読書人』3344号、2020年、読書人。

宮崎裕助「フランス語圏のカント受容」『新・カント読本』牧野英二編、法政大学出版局、2018年、3-22頁。

